

本日の箇所は、ヨハネの黙示録に登場する七つの教会のうち、最後尾に置かれているラオディキア教会への手紙である。この手紙の最大の特徴は、主イエス・キリストからの「称賛」の言葉が一切含まれておらず、最初から最後まで厳しい叱責と悔い改めの促しのみで構成されている点である。他の教会のように異端の教え(ニコライ派やイゼベルなど)や偶像崇拜の誘惑への言及もなく、外部からの激しい迫害もなかった。

ラオディキア教会の最大の危機は、世俗的な平和と物質的繁栄がもたらした「自己満足」と「霊的無関心」という自己欺瞞であった。

このラオディキア教会は、パウロの手紙の中にも出てくる。コロサイの信徒への手紙2章1節と4章13節から16節である。(コロサイはラオディキアから南東約18キロに位置。徒歩で4、5時間ほど)。4章13節以下、特に16節には次のようなパウロの言葉がある。

「この手紙があなたがたのところで読まれたら、ラオディキアの教会でも読まれるように、取り計らってください。また、ラオディキアから回って来る手紙を、あなたがたも読んでください。」

これによると、パウロはコロサイの信徒への手紙を出したとき、ラオディキア教会の信徒たちにも手紙を出したようである。残念ながらこちらの手紙は現在まで見つからないので実際何が記されているかは知るべきがない。けれども、パウロもこのラオディキア教会と深くかかわっていたことは上記の聖句からもわかる。ついでに言えば、パウロは、少なくとも第二回伝道旅行(49年から52年、使徒言行録15章40節から18章22節)と、第三回伝道旅行(53年から57年、使徒言行録18章23節から21章26節)でフリギア(ラオディキア、ヒエラポリス、コロサイなどの地域が含まれている)を巡り歩き、すべての弟子を力づけている(使徒16章6節、18章23節)。

今日のところを理解するために、先にラオディキアの歴史的、地理的背景について学ぶ必要がある。当時、ラオディキアは莫大な富を蓄積した裕福な都市であり、以下の三つの特徴があった。

1. 巨大な金融センター：古代の銀行業が栄え、莫大な金を保有していた。紀元60年の大地震の際も、ローマ帝国からの復興支援金を一切拒否し、自力で都市を再建したほどの財力を持っていた。

2. 羊毛・織物産業:この地域特産の黒く艶のある極上の羊毛から作られる高級な衣服や絨毯は、富裕層の間でステータスシンボルとして高値で取引されていた。

3. 医学校と特産の目薬:「フリギアの粉」から作られる目薬の産地として世界的に有名であり、眼病の治療を求めて多くの人々が訪れていた。

これら「金」「黒い衣」「目薬」という物質的繁栄が、イエス・キリストの提示する「霊的処方箋」の痛烈な皮肉(対比)となっている。

14節。

「ラオディキアにある教会の天使にこう書き送れ。『アーメンである方、誠実で真実な証人、神に創造された万物の源である方が、次のように言われる。』」

ここではイエス・キリストを「アーメンである方」(ὁ ἀμήν、ホ アーメン、the Amen)と紹介する。「アーメン」はヘブライ語で「真実」「確固たるもの」を意味し、神のすべての約束がイエス・キリストにおいて「然り」となり成就することを保証している。

また「万物の源(ἀρχή、アルケー)」とは、時間的順序の「最初(被造物)」ではなく、全創造物の「起源」「支配者」「主権者」であることを意味する。(ヨハネによる福音書1章1節から3節参照)

自らの富に依存していた教会に対し、イエス・キリストこそが真の供給源であることを突きつけておられる。

15-16節。

「わたしはあなたの行いを知っている。あなたは、冷たくもなく熱くもない。むしろ、冷たいか熱いか、どちらかであってほしい。熱くも冷たくもなく、なまぬるいので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている。」

「冷たいか熱いかであってほしい。なまぬるいので、口から吐き出そう」という言葉は、しばしば信仰の「熱心さ(感情の温度)」の比喩と誤解されてきた。しかし、ラオディキアの北方にはヒエラポリス(人々を癒す熱い温泉)があり、南東にはコロサイ(渴きを癒す冷たい湧き水)があった。ラオディキアには有用な水源がなく、遠方から水道橋で水を引いていたため、都市に届く頃にはなまぬるく、石灰分を含んで吐き気を催す不快な水になっていた。

つまりイエス・キリストは、熱い温泉や冷たい湧き水のように「他者を癒し潤す有用性」を持たない彼らの無力な信仰を、嘔吐を催すような嫌悪感を伴う言葉で警告されたのである。

17-18節。

「あなたは、『わたしは金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要な物はない』と言っているが、自分が惨めな者、哀れな者、貧しい者、目の見えない者、裸の者であることが分かっていない。そこで、あなたに勧める。裕福になるように、火で精錬された金をわたしから買うがよい。裸の恥をさらさないように、身に着ける白い衣を買い、また、見えるようになるために、目に塗る薬を買うがよい。」

「わたしは金持ちだ」と豪語する教会に対し、イエス・キリストは彼らが霊的には「惨めな者、貧しい者、目の見えない者、裸の者」であると宣告する。そして、三つの霊的処方箋を「わたしから買うがよい」と命じられる。

一つ目は、「火で精錬された金」である。試練を経て純化された真の信仰。自己満足を捨て、イエス・キリストに依存する霊的豊かさである。

二つ目は、「白い衣」。自らの行い(黒い衣)ではなく、イエス・キリストの血によって洗われ、信者に転嫁されるイエス・キリストの義である。

三つ目は、「目に塗る薬」。自らの霊的悲惨さを正しく認識し、真理を悟るための聖霊の光(目薬)である。

ラオディキアの人々は、高価な「金」や清い「白い服」、はっきりと見えるようになる「目薬」を持っていたが、イエス・キリストによると、真に貴重なもの、真に清いもの、真に見える力を与えるものも、すべてイエスご自身に由来するのであり、それらを得て初めて、ラオディキアの人々は、自分のそれまでの真の姿が認識できるものである(16章15節参照)

19-22節。

「わたしは愛する者を皆、叱ったり、鍛えたりする。だから、熱心に努めよ。悔い改めよ。見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。勝利を得る者を、わたしは自分の座に共に座らせよう。わたしが勝利を得て、わたしの父と共にその玉座に着いたのと同じように。耳ある者は、“霊”が諸教会に告げることを聞くがよい。」

イエス・キリストの厳しい叱責は滅ぼすための裁きではなく、「わたしは愛する者を皆、叱ったり、鍛えたりする」という恵みの手段である。主イエスが人々を愛する愛し方は、「叱ったり、鍛えたりする」という仕方である。これは断罪ではなく、養育的な意味である。「裁かれるとすれば、それは、わたしたちが世とともに積み荷定められるこ

とがないようにするための、主の懲らしめなのです」(コリント一11章32節。「なぜなら、主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者を皆、鞭打たれるからである。」(ヘブライ12章6節)

20 節の「戸口に立って、たたいている」とは、物質主義に陥り、教会の主であるイエス・キリストをご自身の教会から外へ締め出してしまった悲劇的な状態に対し、イエス・キリストが忍耐深い愛をもってノックし続けておられる姿である。悔い改めてイエス・キリストを迎え入れ、「共に食事をする(親密な交わりを持つ)」者には、キリストと共に玉座に座るといふ、七つの教会の中で最も栄光に満ちた特権が約束されている。

ラオディキア教会への手紙は、現代の経済的・社会的に安定した環境にある教会やキリスト者にとって、極めて現実的な警告である。私たちは明白な迫害や異端の教えがなくても、世俗的な豊かさや平穏な日常の中で「自分は十分にやっている」という霊的自己満足に陥る危険を持っている。自らの霊的な貧しさを認め、日々イエス・キリストから真の信仰と義の衣を受け取り、心の扉を開いて主イエスを生活の中心にお迎えし続けることこそが、私たちが常に立ち返るべき信仰の原点である。



イギリスの画家ウィリアム・ホルマン・ハントが1851年から1853年にかけて制作した寓意的な宗教画、『世の光 (The Light of the World)』